

女性発達障害児者を支援者はどのような対象として考えているのか

—— 支援者に残るジェンダーバイアスとその再生産

向井理菜
(立命館大学大学院)

近年＜女性発達障害＞について注目が高まっており、支援者らが女性発達障害児者やその保護者・家族向けに書いた著作（支援者本とする）が続々と出版されている。本研究では、支援者らは＜女性発達障害児者＞をどのような存在として捉えているのかを明らかにすることを目的とした。支援者本をM-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー）を用いて分析した。その結果、支援者らは、女性発達障害児者は発達障害であることが気づかれにくいことで困難を抱え、二次障害を起しやすく、思春期・結婚生活・仕事上で問題が表出する存在であると考えていることが明らかとなった。女性発達障害児者の困難さの要因にジェンダーロールの存在を挙げながらも、支援者らの中には一般的な女性像に対するジェンダーバイアスが残されていた。また、支援者本の記述は、発達障害というレッテルを受けることで女性らしくしなくてもよいとするような、免責を生むものでもあった。

キーワード

発達障害、女性発達障害、複合差別、インターセクショナリティ、ジェンダーバイアス

I. 問題・目的

1. “女性発達障害児者”への注目 が集まっている。従来、発達障害¹とは男性の
近年、＜女性の発達障害＞について注目 性のものであると考えられてきた。初めて

1 発達障害とは、発達障害者支援法において「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものとして政令で定めるもの」と定義されている。(文部科学省『発達障害者支援法（平成十六年十二月十日法律第百六十七号）』2005年施行 https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1376867.htm (2021年4月3日取得))。

自閉症²を報告したレオ・カナー (Kanner, Leo, 1943) が紹介したのは8名の男児症例と3名の女児症例であり、その後アスペルガー症候群や高機能自閉症の原型の最初の報告となったハンス・アスペルガー (Asperger, Hans, 1944) の論文で紹介されたのは男児のみであった。アスペルガーは「完全な自閉的特徴を備えた女子はいない」として、高機能自閉症者が男性に限定されている何らかの遺伝的要因が存在する可能性を示唆した。神尾 (2005) は、「自閉症は男性に多い。これは数多くの調査報告に基づいた、時代や地域を超えて一貫した、一つの事実である」「知的障害、読み困難、注意欠陥／多動性障害など、他のタイプの発達障害においても、同様に男子に多いことが知られている」と述べている。

一方で、自閉症当事者の体験記やエッセイは、女性当事者らが記し始めたと言って過言ではない。高機能自閉症当事者のテンプル・グランディン (Temple Grandin) やドナ・ウィリアムズ (Donna Williams) が1980年代後半から1990年代に著作を発表している。ドナ・ウィリアムズの『自閉症だったわたしへ』は「世界で初めて自閉症の精神世界を内側から描いた同書は、十数

カ国語に翻訳されてベストセラーとなった』³と新潮社ホームページにより紹介されている。日本では『自閉症だったわたしへ』に影響を受けた森口奈緒子が自伝を発表し、さらに彼女らに影響を受けた当事者らが続々と本を出版している現状がある⁴。神尾 (2005) は、女性の自閉症者が少ない一方で、著名な自伝作家に女性が多いのはなぜだろうかと問いを發している。

医学論文では、本田ら (2000) が高機能広汎性発達障害の女子例に関する論文を発表し、その後浅井ら (2005) が高機能広汎性発達障害の母子例への対応に関する論文を発表している。浅井らの論文では、特に子どもの虐待が絡み入院治療に至った高機能広汎性発達障害の症例で、母親への対応に苦慮する事例があり、その場合に母にも発達障害と同質の社会性の問題が潜んでいることを想定し介入した例を検討している。すなわち、発達障害児童を育てる資源としての母親への注目が生まれている。2009年には高山が自身の体験談を元にした文章を発表し、「ADHD⁵のある女性が適切な治療を受けられないことによる子育てへの悪影響は、次世代の社会の構成員のQOLにも関わることであり、緊急な課題と言える。」と

2 自閉症、アスペルガー症候群、広汎性発達障害は、アメリカ精神医学会による精神疾患診断・統計マニュアルである DSM- Vにより、自閉スペクトラム症という一つのスペクトラムとして認識されるようになった。情緒的な関係、非言語的コミュニケーション、対人関係の維持などの困難さや、こだわりの強さが特徴とされている (American Psychiatric Association 2013=2014:49-50)。

3 新潮社ホームページ『ドナ・ウィリアムズ著者プロフィール』<https://www.shinchosha.co.jp/writer/561/> (2021年4月3日取得)。

4 立岩真也, 2014, 『自閉症連続体の時代』みすず書房。

5 ADHDとは注意欠陥多動性症のことである。注意欠陥多動性症とは、「多動・衝動性」と「不注意」の二つの診断基準があり、これらのうちの片方、または両方の症状がある場合に診断をつけることができるとされている (American Psychiatric Association 2013=2014:58-59)。

述べ、ここでも子育ての資源としての母親への言及がなされている。以降、性差に言及したものや、女性発達障害児者にまつわる論文が発表されていく。

このような流れを受けてか、2013年に『レディを育てる親と支援者たちへ』という女兒の高機能自閉症スペクトラム支援について書かれた小冊子が神奈川県発達障害者支援センターから発行された後、後に検討するように、2015年ごろから「女性の発達障害」という言葉を冠した、「女性発達障害児者」やその家族に向けた著作が続々と出版されるようになっていく。「女性発達障害児者」への注目が高まっていることが現れている。

2. 発達障害と社会モデル

障害学では、障害を個人の「医学的モデル⁶」に対峙して、障害者の身体ではなく障害者に不利益を与える社会を問題の中心と捉える「社会モデル」を提唱した(榊原 2019)。イギリスのマイケル・オリバー(Michael Oliver 1983)によって、「障害の社会モデル」という名称が誕生した。オリバーによると、従来障害は、身体の欠損や機能不全(損傷)から直接生じる帰結とみなされてきており、そういったインペアメント(損傷)を持つものが社会的困難を経験するのは当然であると考えられてきた。しかし社会モデルとは、そういったインペアメントと社会的条件との間で起きる難しさをディスアビリティ(障害)とし、それ

こそが障害者に困難さをもたらしているものとした。

これらの考え方は、自閉スペクトラム症をはじめとする発達障害についても、同じようなことが言えるだろう。発達障害の特性を持っているだけでは「障害」にはならず、社会によりその特性が困難さへ変貌したときに「障害」となる。発達障害の診断に広く用いられているDSM-5でも、特性を抱えている上で「これらの症状が社会的、職業的、または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こしている時」や「社会的、学業的、または職業的機能を損なわせているまたはその質を低下させている」という明確な証拠がある場合」などというように、生活上の適応に障害をきたしている際診断をするようにとされている(American Psychiatric Association 2013=2014: 49-50,58-59)。

3. ジェンダーと障害

女性発達障害児者は女性と発達障害という二つのマイノリティ性を抱えている。瀬山(2006)は、障害を持つ女性は「ディスアビリティ」と「ジェンダー」という二つの異なる社会的文脈双方により差別的状況に置かれる集団であると述べ、女性障害者が「誰と暮らしていても、どんな状況、環境下でも、だれか、あるいは何かの管理や庇護のもとにはなく、自分の意志で選び、決めて生活すること」の実現のためには、性別によって異なる障害者施策が必要とな

6 寺島(2001)によると、マイケル・オリバーは医学モデルと社会モデルという用語で障害モデルを概念化した。オリバーは、現在は医学モデルについて個人モデルと呼ぶようになっていくものの、英国の障害者運動においては、そのまま医学モデルと呼ばれていることが多い。

ると結論付けている。第三回世界女性会議では、家事をはじめとする性別役割が、障害を持つ女性の社会参加の付加的な困難要因となりえるという認識が示され、女性の家事責任を軽減するための援助サービスの必要性が提示されていた。瀬山（2006）のいうように、こうした方策は、現状の社会へのアクセスを目的とし、障害を持つ女性が、障害を持たない女性同様に、既存の女性役割を担えるように支援することを目的としている意味で、性別秩序維持型の方策と位置付けることができ、現行の社会の中で女性らしく生きることを目的とした支援策を講ずるということは、必要性の観点から求められる方策だとも考えられる。しかし瀬山（2006）は、このような現行の社会での性別役割は、男性に比べ女性により負担を強いる固定した性別役割分業に基づくものであり、そうした規範を維持させたまま、障害を持つ女性がそこに参加していく事は、障害を持つ女性たちに、新たに過度な負担や困難を強いることにつながるとも指摘している。このように、社会の中で女性はどのような存在として位置付けられているのか、そして専門職をはじめとした支援者がどのような支援を行おうとしているのかについて、意識的で批判的な目を向けていなければ、支援の手を差し伸べているように見せながらも新たな負担を当事者に強いることにつながりかねない。そのため、支援者が当事者をどのような存在として考えているのかを明らかにすることは重要なことである。

以上述べてきたように、女性発達障害児者へ注目が高まり様々な支援方法が提案さ

れているが、それらの支援方法はどのような視点から提案されているのだろうか。発達障害は社会との間で起きる障害であり、その解決には社会モデルの視点を持ち支援にあたることが重要である。さらに女性発達障害児者の問題においては、ジェンダーについても視野に入れ検討する必要がある。現在の支援者が女性発達障害児者をどのような存在として考えているのかを明らかにすることで、現在行われている支援について再検討を行い、より良い支援について考える契機とすることができるのではないだろうか。

4. 研究目的

以上を踏まえ、〈女性発達障害児者〉への注目が高まっている中で、支援者が〈女性発達障害児者〉をどのような存在として捉えているのかを明らかにすることを本研究の目的とする。本論で述べる支援者とは、発達障害についての診断を下す医師や医療関係者、そして診断が降りたあとの発達障害児者をサポートする心理職や放課後等デイサービス職員などを示す。現在、医師や医療関係者のみが当事者やその家族の支援を行なっているわけではない。そのような現状を反映し、医師や医療関係者だけではなく、より広い専門職を支援者として対象に含むこととした。そして支援者が当事者やその保護者、家族向けに出版した著作を本研究では、〈支援者本〉と名付ける。支援者本において、あえて〈女性〉や〈女兒〉を冠するものがあるということは、従来的一般向け（もしくは男児、男性向け）とは違うものが〈女性発達障害児者〉

にはあると想定されているのであろう。

また、これまで述べてきたように、発達障害の困難はその社会や文化との摩擦により起きる。社会や文化というものはその捉え方によりさまざまな単位があると考えられるが、本研究では、日本という社会においての〈女性発達障害児者〉の困難さを検討したい。日本で、女性はどのような存在として考えられているのか、その上で、日本の〈女性発達障害児者〉は、どのような摩擦を起こしたり、社会の不適応を起こしたりすると考えられているのかを明らかにすることを目的とする。そのため、女性発達障害児者当事者、もしくはその保護者や家族に向けて書かれたと考えられる著作の中で、国内で支援を行なっている著者による著作を調査対象とした。表1は対象とした著作の一覧である。

II. 分析方法

支援者が〈女性発達障害児者〉をどのような存在として捉えているのかを明らかにするにあたり、木下康仁(2003)の修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(M-GTA)を用いて、これらのデータを分析することとした。M-GTAは変容のプロセスを体系的に見るのに適している分析方法である。支援者は女性発達障害児者を、どのような生活を送り、どのような人生を送り、どのような困難を抱え、その中でどのような変容があるとしているのか、そういったプロセスに注目することとした。資料に繰り返し目を通す際、研究テーマの一端をよりよく明らかにすることができるよう、「支援者は、女性発達障害児者が困難を

抱えるようになるプロセスをどのように考えているのか」という点に着目し、これを分析テーマとした。このことが現れている記述を抽出し、類似のものをまとめて概念を生成するワークシートを作成した。その後概念同士の関係性などを検討し、図にまとめた。

なお、分析対象である支援者本には、発達障害や自閉スペクトラム症、ADHDの診断基準についての説明や、薬に関する記述なども含まれていた。今回はそれらの部分は除外を行い、着目した分析テーマに即したことが書かれている記述のみを対象とした。また、支援者本においても、「当事者の声」や「ケース例」のようなものが書かれている場合も多かった。今回これらは先述の理由から除外し分析を行った。

III. 分析結果

1. モデル図の概要

分析の結果、41の概念が抽出された。それらは9つのカテゴリーによって、図1のようにモデル化された。モデル図は左から右に向かう時系列として表されている。女性の発達障害児者は【気づかれにくさから困難を抱える】ものとされており、そのため適切な診断や医療に携わることができず、【二次障害を起こしやすい】とされている。そのように気づかれづらい女性の発達障害であるが、【思春期に問題が表出する】【結婚生活で問題が表出する】【仕事上で問題が表出する】という3つのタイミングで問題が表出し、医療につながると考えられている。女性の発達障害児者に問題が表出する際の背景には、【従来の発達障害の姿】

女性発達障害児者を支援者はどのような対象として考えているのか

表1

出版年月	タイトル	著者・監修者	出版社	著者・監修者情報
A	2013年2月 レディを育てる親と支援者たちへ	神奈川県立中央やまゆり園 神奈川県発達障害支援センター ターカナガワA（エース）		高機能自閉症女子の親グループ「レディを育てる会」で話し合われた内容をもとにしたもの。
B	2015年3月 女性のアスペルガー症候群	宮尾益知	講談社	精神科医。女性発達障害者向けの著作を多数出版。
C	2015年11月 なんだからまうまいかないのは「女性の発達障害」かもしれません	星野仁彦	PHP出版	心療内科医。発達障害を専門とする児童精神医学の第一人者。
D	2015年12月 女性のADHD	宮尾益知	講談社	既出
E	2016年10月 女の子の発達障害「悪春期」の心と行動をサポートする本	宮尾益知	河出書房新社	既出
F	2017年2月 マンガでわかる私って、ADHD 脳?	司馬理英子	大和出版社	精神科医、医学博士。1997年に『のび太・ジャイアン能幹評』を刊行し、ADHDを初めて日本に本格的に紹介した。
G	2017年3月 女性の発達障害 女性の悩みと問題行動をサポートする本	宮尾益知	河出書房新社	既出
H	2018年3月 発達障害の女の子のお母さんが、早めを知っておきたい「47のルール」	藤原美保	エッセンシャル出版	健康運動指導士、介護福祉士。発達障害の女児むけ放課後等デイサービス「LUCIE」を設立。
I	2018年6月 わたし、ADHD ガール。恋と仕事で困ってます。	司馬理英子	東洋館出版	既出
J	2018年11月 発達障害の女の子の「自立」のために親としてできること	藤原美保	PHP出版	既出
K	2019年1月 よくわかる女性のアスペルガー症候群	司馬理英子	主婦の友社	既出
L	2019年2月 最新図解女性のADHD サポートブック	藤原洋一・高山恵子	ナツメ社	藤原洋一：お茶の水女子大学名誉教授、医学博士。長年発達障害児の医療に携わる。／高山恵子：ADHD当事者。臨床心理士。ADHD 支援団体 NPO 法人えいそくくらぶ代表。
M	2019年3月 最新図解女性の発達障害サポートブック	本田秀夫・額田みおり	ナツメ社	本田秀夫：医学博士。専門は発達精神医学。日本自閉症協会理事、日本自閉症スペクトラム学会常任理事。／額田みおり：カルフォルニア大学ロサンゼルス校教育学大学院心理学修士課程修了。臨床発達心理士。
N	2019年3月 発達障害のある女の子・女性の支援ー「自分らしく生きる」ための「からだ・心・関係性」のサポートー	川上もひろ・木谷秀勝	金子書房	川上もひろ：医学博士／木谷秀勝：山口大学教育学部附属教育実践総合センター教授。女性のASD者グループの「アスペルガーの集い」のスタaffer。
O	2019年3月 ASD、ADHD、LD 女性の発達障害 会話/職場編	宮尾益知	河出書房新社	既出
P	2020年3月 よくわかる女性のADHD 注意欠如・多動症	司馬理英子	主婦の友社	既出
Q	2020年6月 医者も親も気付かない女子の発達障害	岩波明	青春出版社	医学博士。昭和大学附属島山病院院長を兼任、ADHD 専門外来を担当。
R	2020年8月 女性のための発達障害の基礎知識	宮尾益知	河出書房新社	既出

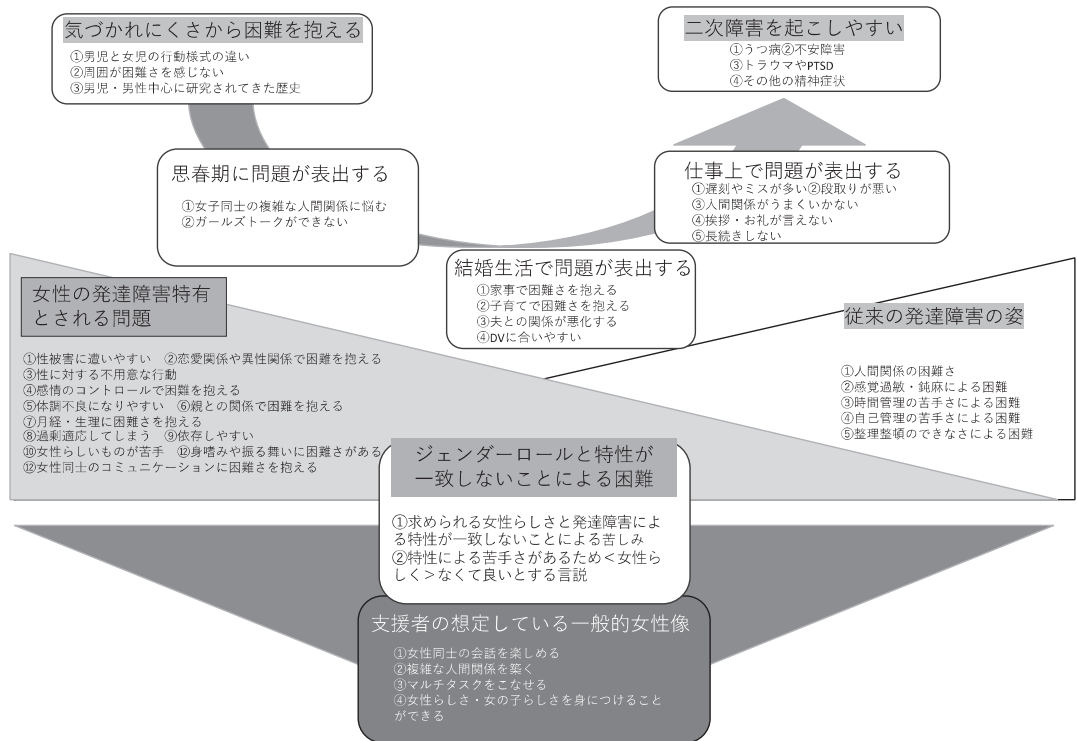


図1 M-GTAモデル図

と【女性の発達障害特有とされる問題】の二つの要素があると考えられた。これら二つの要素を検討すると、全年代に【女性発達障害特有とされる問題】と【従来の発達障害の姿】の両方が背景にありつつ、年齢が若いうちには【女性発達障害特有とされる問題】が関わっている問題が表出しやすく（特に【思春期に問題が表出する】に顕著である）、年齢が進むにつれ【従来の発達障害の姿】の要因の問題が表出しやすくなっている（特に【仕事上で問題が表出する】に顕著である）、というような姿がわかる。さらに、【女性発達障害特有とされる問題】【従来の発達障害の姿】の問題だけにとどまらず、発達障害の特性と求められる女性らしさが一致しないことにより、さら

なる困難さを生活全般の中で抱えることになる。これを【ジェンダーロールと特性が一致しないことによる困難】と述べ、その対応策として【特性による苦手さがあるため<女性らしく>なくて良いとする言説】が伝えられていた。これらのすべての基盤に【支援者の想定している一般的女性像】が存在していた。

2. モデル図の詳細

以下に、分析結果の詳細を記述する。なお、カテゴリーを【】、概念を[]で表す。なお、特徴的な言葉について<>で表す。

1) 【気づかれにくさから困難を抱える】

(B,C,D,E,G, H,J,K,L,M,N,O,Q,R)

女性の発達障害は、幼少期や児童期に目

立った問題を起こさないために気づかれにくいとされている。それは、「男児と女児の行動様式の違い」(B,D,E,F,G,M,N)があり、女児の発達障害児は男児の発達障害児のように授業中に立ち歩いたり暴力行動を起こすなどの問題行動を起こさない上、一般的に女性は男性よりも協調性スキルが高く(司馬 2018: 28)、物事への適応能力が非常に高くつまずきをカバーするために、無理をして周囲に合わせるが一時的にできてしまい(榎原・高山 2019: 22)、女性の方が社会性がある対人関係にすぐれ、こだわりも少ない(宮尾 2020: 23)ために起こるとされている。そのため女性発達障害児者は「大人しい女の子(司馬 2018: 28)」「ちょっと変わった女の子(司馬 2018: 28)」「おとなしくてほんやりした子(司馬 2020: 22)」とされ、「障害の問題ではなく性格の問題(星野 2015: 157)」とされてしまうようだ。つまり女性発達障害児者は「周囲が困難さを感じない」(C,E,G,J,K,O,Q,R)存在なのである。

相談の中で出会った中高生の例で言うと、学校生活で彼女たちに規律違反があるわけではないため、特に問題視されなかったという背景がありました。前髪は眉毛にかからない。ショートヘアの子が多いため頭髪チェックも引っかからない。パーマをかけたりヘアカラーをしたりすることもない。そもそも、髪を伸ばしたいとかブローしたいとか、おしゃれに意識が向かない子も少なくないため、保護者も教員も「言うことをよく聞く、おとなしくて

真面目な子」と思ってしまい、彼女たちが抱えている困りごとに気がつかないのです。(藤原 2018b: 56)

この記述は、学校運営上で支障のない子どもはあまり目がかげられないという現状が現れている点で興味深い。授業中にじっとしていなかったり、よくケンカをしたり、感情が大爆発するなどの<問題行動>があれば問題視され診断につながるが、そうではない児童は<気づかれぬ>。藤原(2018b)は、「記憶力が弱くてミスが多い、忘れ物が多い、注意力散漫で人の話を聞いていないなどの『本人にとっての困りごと』があるはず」とも述べている。しかしこれらは教室内では目立たないために気づかれぬ。女性は男性と違い、目立った問題行動を起こさないために<気づかれぬ><見逃される>ということのようだ。

さらに、気づかれにくさには、「男児・男性中心に研究されてきた歴史」(B,D,E,G,L,K,N)も関係している。

このように発達障害の女性の診断の難しさを抱える問題点が顕在化しにくい背景には、多数を占めていると思われた発達障害の男の子・男性(以下、発達障害の男性)に特徴的な行動や問題点を中心にした診断基準や問題行動への対処法が研究されてきた経緯があります。(川上・木谷 2019: 7)

アスペルガー症候群の特徴を持つ児童を最初に紹介したハンス・アスペルガーは、その症例報告で男児のみを紹介した(宮尾

2017: 32) ため、アスペルガー症候群の女兒がいると想定されないまま研究が続けられてきた。ADHDについても同じように男性有意な障害であると考えられ、ADHDの女性は少ないとされてきた歴史がある。

このような要因から、女性の発達障害児者は気づかれないままに困難を抱え、適切な医療に繋(正字)がれず、【二次障害を起こしやすい】とされている。

2) 【思春期に問題が表出する】

(B,C,D,E,G,H,I,J,K,L,M,N,Q,R)

女性発達障害児者は、思春期に問題が表出することが一番多いと支援者は考えているようであり、支援者本ではこの点についてかなり多くの記述があった。思春期になると[女子同士の複雑な人間関係に悩む](A,B,C,E,G,K,L,M,R)ようになり、周囲とのズレを感じるようになると考えられている。例えばADHDの、思ったことをそのまま話してしまう特性から、つい秘密の話を別の人に漏らしてしまったり、「洋服が似合っていないよ」「あなた太ったね」など相手が傷つくような不要なことを話してしまったりするため、仲間外れにされてしまうことがあるとも述べられている。さらに、この頃になると周りの女子たちは<ガールズトーク>を始めるとされており、発達障害の女兒は[ガールズトークができない](B,E,G,H,K,M,R)ためにいじめられたり、疎外感を感じたりすると考えられているようだ。

支援者本において、ガールズトークとは①曖昧で抽象的な他愛のない会話、目的のない会話②恋愛やファッションの話や、噂

話や陰口③話題の移り変わりが激しい④女性同士に必須のもの⑤<暗黙の了解>や<裏>がありそれらを読み取る必要がある、というようなものとして捉えられていた。曖昧な表現や抽象的な表現を理解することが難しい女性発達障害児者は、<ガールズトーク>のような目的のない会話をこなすことができないとされている。曖昧な言葉や態度が会話の中で出現するのは女の子特有だとされ、発達障害の女兒について「男の子との方がしゃべりやすいと感じて、自然と男の子とばかり仲良くなる女の子もいます」(司馬 2019: 51)というように述べられることもあった。また、女性発達障害児者は、恋愛やファッションの話題、噂話や芸能人の話などに興味がなく、そのため<ガールズトーク>に入れないともされていた。これらの話は女性なら通じるような話であり、男性にはあまり見られない女性特有の会話パターンであるとされていた。

話題の移り変わりが激しい会話も、女性発達障害児者にとっては対応が困難なものであるとされていた。一つの話にこだわっている間に周りの話題が変わっていつてしまったり、そもそも聴覚情報の処理の困難さから、複数人の会話自体が難しいとも述べられていた。

私も以前、女兒会SSTを企画してみました。内容を聞いて、会話の移り変わりの激しさに諦めてしまいました。患者さんの中にはある程度ガールズトークができるようになった女性があります。10年以上女子大でSSTを行い、小学校3年生からは女子だけの

SST を続けてきた女性だけでした。このようなことは通常不可能ですから女の子と付き合わなくても、一人でも自分の趣味に生きることや同じ趣味を持つ人といつか出会うことを信じた方が現実的だと思います。(宮尾 2017: 29)

このように、一般の女性たちにとっては「**くガールズトーク**」が必須であるものの、女性発達障害児者にとっては、訓練を行ってもすることができない、とても難しいものである、と考えられているようだ。

「**く暗黙の了解**」や「**く裏**」が読めないことも、女性の発達障害児者が「**くガールズトーク**」が苦手なことの要因として考えられていた。「**く暗黙の了解**」には、集団間のヒエラルキーを読み取った行動をとる、仲間同士であれば似たような服装をする、グループ内で話したことを他のグループには漏らさない、などの例が挙げられており、一般的な女性はこのようなことをしながら集団としての密着感を高め、親しい人間関係を形成していくが、女性発達障害児者は字義通りのこと以外のものは読み取りにくいので同じような行動ができず、集団から外されてしまうことになるかとされていた。

女性同士のコミュニケーションでは、特に「おしゃべり」が大切です。子どもの頃から、男の子同士は、黙ってそれぞれ好きなおもちゃや本、ゲームなどに夢中になっていても問題なく、それで人間関係が成立しますが、女の子同士は、常におしゃべりを交わし、ああでもない、こうでもないと他愛の

ない会話を楽しむことでコミュニケーションが成立します。その「おしゃべり」が苦手なため、AS の女性は、女性同士の人間関係でつまづくことが多いのです。割り切って男性っぽい付き合いができる集団に入ってしまった方が、居心地が良いケースも多いでしょう。(星野 2015: 79)

このように、【支援者の想定している一般的女性像】は「おしゃべり」を通してコミュニケーションを成立させているが、女性発達障害児者はそのようなことが苦手なため女性集団に入ることができないと考えられている。支援者本では、そういった「**くガールズトーク**」が苦手な女性発達障害児者に対し、男性は黙って好きなおもちゃや本、ゲームに夢中になっていればそれで人間関係が成立するため、そういった集団に入っていくことを勧めている。

3) 【結婚生活で問題が表出する】

(B,C,D,G,I,J,L,L,M,P,R)

結婚生活で問題が表出することも多いと考えられている。結婚して妻、嫁、母など求められる役割が増えるとともにその生きづらさも増す(岩波 2020: 110) ようだ。学校や職場ではある程度の枠組みが用意されているため、言われたことをこなしていればやり過ごすことができる。しかし結婚生活では主体的に動かなければならないためにうまくいかないが増える。さらに、妻として家事を担ったり、子ども・夫をサポートしたりする必要があるが、その特性上、物の管理が苦手であったり、時間管理

が苦手であったりするために「家事で困難さを抱える」(C,G,I,K,L,M,P,R)、[子育てで困難さを抱える」(C,D,G,K,L,M,P,R)とされている。片付けや段取りが悪いために、または仕事で疲れて帰ってくる夫に対しまとまりのない話をする事で夫をイラつかせ、「夫との関係が悪化する」(C,K,L,M,N,P)、[DVに合いやすい」(B,C,G,J,K,R) こともあると述べられている。

さらに、義父母との関わりも必要となってくる。このようなことを宮尾(2020: 150)は「つまり、女性は結婚すると“マルチプレイヤー”になることが求められるわけです。ところが、発達障害のある女性は、複数のことを同時にこなすことが苦手なのです」というように述べている。女性発達障害者の問題が結婚生活で表出するのは、役割が増え、マルチプレイヤーとして行動しなければならぬことから起こるものであるとされている。

4) 【仕事上で問題が出出する】

(C,D,F,G,I,K,L,M,O,P,Q,R)

仕事上での困難さは、主には【従来の発達障害の姿】で述べられているようなことに起因する。[遅刻やミスが多い」(C,D,F,G,I,K,L,M,O,P,Q,R)、[段取りが悪い」(C,F,G,Q) ことで業務遂行自体にストレスを抱えてしまう、[挨拶・お礼ができない」(G,K,O,R) ことで「人間関係がうまくいかない」(C,G,I,K,L,O,Q)。これらが重なり仕事が「長続きしない」(C,D,G,O,R) ことも問題として挙げられている。社会性の乏しさから「あいさつ」「お礼」「社交辞

令」などができないためトラブルが起き(宮尾 2020: 60)、会社をやめてしまうことにもつながるとも述べられていた。

また、ここでも「女性同士のコミュニケーションに困難を抱える」ことが取り上げられている。職場の女性職員とうまく「ガールズトーク」できないためコミュニケーションが取れず、困難さを抱えるといったものである。「女性同士のコミュニケーションに困難を抱える」ことは、主には思春期に大きな問題として現れるとされているが、その後生涯にわたって続くものとしても捉えられているようだ。

5) 【二次障害を起こしやすい】

(B,C,D,F,G,J,L,M,N,O,Q)

以上見てきたような様々な問題があるのにもかかわらず、女性の発達障害児者は気づかれにくいために、過剰適応気味に無理をして過ごしていることが多いとされている。そのため、「うつ病」(B,C,D,F,G,K,L,M,O,Q)、[不安障害」(B,C,D,F,G,L,M,O,Q)、[トラウマや PTSD」(B,C,L,M)、[その他の精神症状」(B,C,G,L,M,Q)などを引き起こしてから医療にかかり、その結果発達障害が発覚する女性が多いのだと述べられていた。

6) 【女性の発達障害特有とされる問題】

【女性の発達障害特有とされる問題】は、思春期以後全年代に起きやすいと考えられているものである。しかしながら特に思春期にこれらの問題が主要な問題として現れるとされている。

女性発達障害児者は「性被害に遭いやすい」(A,B,E,G,H,I,I,J,K,M,O,Q,R) 存在として

描かれている。女性発達障害児者は男性に騙されやすい存在であるように表現されており、「休憩していこう」など声をかけられると疑うことなくそのままホテルについて行ってしまったり、断れない・Noと言えない性質があるために男性の誘いを断れないような存在であると考えられているようだ。同じ理由から「恋愛関係や異性関係で困難を抱える」(C,D,E,G,H,I,J,K,L,M,N,O,P,R)とも述べられていた。恋愛に関しては一方的に熱くなり、ストーカーのようになってしまうこともあると考えられており、さらに、セックスの意味や社会的な価値を理解しないまま関係を結んだり、ADHDの衝動性から気軽にセックスをしてしまうということも問題視されている。これらは「性に対する不用意な行動」(C,D,E,G,I,J,K,O,R)として表現されている。

「依存しやすい」(C,D,I,L,Q)ことも述べられていた。脳の報酬系の問題から、もしくは自己肯定感の低さ、ストレス耐性の低さなどから、お酒、買い物、セックス、タバコやカフェインなどに依存しやすいとされていた。

「感情のコントロールで困難を抱える」(B,C,D,F,H,I,K,L,P,Q)ことについては、突然キレたり、パニックを起こしたり、ヒステリックな対応をしたりしてしまうという表現で述べられていた。さらにはADHDの特性から、衝動的に怒るなども問題として現れるとされていた。

また、女性の発達障害児者は男性とちがいで、問題が内在化しやすいため、ストレスや困難さをため込んだ結果、胃腸の調子が悪くなる、睡眠障害が起きる、疲

労感を常に感じている、自律神経失調症が起こる、など「体調不良になりやすい」(B,E,G,L,M,N,O,R)存在として述べられていた。

感覚過敏の問題でナプキンをつけることを嫌がる、目に見えない身体の変化に対応できないなどで「月経・生理に困難さを抱える」(A,B,C,H,K)ともされている。一般的な女兒は友人たちから生理についての対処法を学ぶが、女子同士の友人関係を築きづらい発達障害の女兒たちは生理にまつわることを学べないために困難さも生まれる。発達障害の女兒たちは多くのことを親に頼らなければならないし、親も積極的に多くのことを教えなければならないようだ。生理に限らず、身嗜みやファッション、恋愛や性についても、当事者に、母をはじめとした家族に教えてもらうことを推奨している。

ここでは母や家族は頼れる存在であり、関係が良好であることが前提となっている。しかし一方で、母娘関係は複雑になりがちで、「親との関係で困難を抱える」(D,E,G,K,M,N,P)とも記述されている。母にとっては目の前の娘が過去の自分であり、過去の自分のつらさを娘を通して再体験することから難しさを抱えると述べられていた。そのように「親との関係で困難を抱える」と記述されているにもかかわらず、親との関係が良好であることが前提とされたアドバイスが掲載されている現状がある。親との関係で困難を抱えている当事者がどのように生理や性について学んでいくのかは考えられておらず、また、親との関係に頼りがちであるから母娘関係がより複雑になってしまう可能性も考慮されてい

ないようである。

気づかれづらいという特性と相互作用して、[過剰適応してしまう] (K,L,M,R) という問題も起きているようだ。女性は男性よりも特性をカバーしようとする真面目に努力する人が多く、困難さをうちに秘めながらも過剰に適応しようとするため、【二次障害を起こしやすい】のだと考えられている。

[女性らしいものが苦手] (A,B,C,E,G,J,O,P,Q) な存在であることも、数多く述べられていた。女性的な行動や女性としての習慣が身に付かず、化粧やムダ毛の処理などがなかなか身に付かない、ボーイッシュな服装を好み、女性的な服装を嫌がる、足を開いて座るなどの女性が一般的に避ける仕草をよくする、仕草が全体的に荒っぽい、男性的になろうとするなど、[身嗜みや振る舞いに困難さがある] (A,C,F,G,H,I,L,K,M,O,P,R) こととされ、そもそも女性らしさに価値を感じていないために、こういった行動が身に付かないとする説明もあった。

[女性同士のコミュニケーションに困難さを抱える] は、【思春期で問題が表出する】に主な要因として述べられていたが、全年代の発達障害の女性にとっても問題となると述べられていた。内容としては女性らしい気遣いができないために同性から嫌われてしまう、話を仕切りたがるために嫌われる、ガールズトークができない、などが挙げられていた。

7) 【従来の発達障害の姿】

(B,C,D,E,F,G,H,K,L,M,N,O,Q)

発達障害の特性として、診断基準として

言われていることや、その特徴として従来言われてきたことと同じことが述べられてもいる。これらは、女性特有のものとはされずに語られているものである。

「対人関係の困難さ」と「こだわりの強さ」という特性があり、人とのコミュニケーションでつまずきやすい傾向がある(本田・植田 2019) とされている。これは、DSM-5にある自閉スペクトラム症の診断基準である、「対人コミュニケーションの領域」と「限局された行動・興味の領域」という二つの領域を、一般にも伝わりやすいもの書き換えたものであると理解できる。そしてこういった診断基準から直接言えることとして、[人間関係の困難さ] (E,G,I,K,L,M,N,R) があるとされる。

同様に[感覚過敏・鈍麻による困難] (B,C,G,H,K,M,N,Q,R) も言われている。これも、DSM-5による限局された行動・興味の領域に関して特徴として挙げられていることである。

感覚刺激に対する過敏さまたは鈍感さ、または環境の感覚的側面に対する並外れた興味(例：痛みや体温に無関係のように見える、特定の音または触覚に逆の反応をする、対象を過度にかいだり触れたりする、光または動きを見ることに熱中する)(American Psychiatric Association 2013=2014: 49)。

ADHDの特性として、[時間管理の苦手さによる困難] (C,D,F,G,I,L,M,N,Q,R)、[自己管理の苦手さによる困難] (C,D,E,F,

G,O,P,Q)、[整理整頓のできなさによる困難] (C,D,E,F,I,L,M,P) も挙げられているが、これらも、DSM-5による記述から直接的に考えられるものである。

しばしば日々の活動(例:用事を足すこと、お使いをすること、青年期後期および成人では、電話を折り返しかけること、お金の支払い、会合の約束を守ること)で忘れっぽい。(American Psychiatric Association 2013=2014: 58)

このような「忘れっぽさ」から、時間管理や自己管理の苦手が生まれるとされており、そこから主に仕事上での困難が生じるとされている。また、

課題や活動に必要なもの(例:学校教材、鉛筆、本、道具、財布、鍵、書類、眼鏡、携帯電話)をしばしば無くしてしまう。(American Psychiatric Association 2013=2014: 58)

というように整理整頓に関してもまた診断基準に載っている通りのことである。こちらも、主に仕事上で困難が生じるとされている。

そして、これらは社会が想定する女性の姿との不一致と関連し、女性発達障害児者を苦しめるとされている。

さらに、なくす、忘れる、散らかすといった行動は、社会が期待する女性像からもかけ離れています。そのため「片付けられない女」というレッテルを

貼って、暗に“ダメな女”と非難の目を向けてしまいがちです。それが特性のある女性の心を傷つけ、自信を失わせる要因にもなります。(宮尾 2020: 28)

8) 【ジェンダーロールと特性が一致しないことによる困難】(E,K,L,M,N,P,Q,R)

以上、女性発達障害児者のさまざまな困難をまとめてきた。一方で、もう少し大きな括りから見ると、女性に特徴的なものとして、【ジェンダーロールと特性が一致しないことによる困難】があるとされていた。

封建的文化が色濃く残る日本では、男性と同じように女性が社会に進出して自分の能力を発揮し、評価されることが難しい場合もあります。こうした文化のもとでは、女性は家庭にとどまり、家事や育児に専念して「家」を守ることが求められてきました。そして、そうした役割を担うためには、奥ゆかしく、周りの空気をよく読んで気が利き、家事を上手にこなし、人の世話をするのが得意な女性がふさわしいと考えられてきました。つまり、これらの資質を備えた女性の方が、社会的に高く評価されてきたということです。このような、型にはまった「女性らしさ」が求められる社会では、発達障害の特性を持つ女性は、肩身の狭い思いをしなければなりません。(本田・植田 2019: 128)

このように、発達障害の特性は、<求められる女性像>や<求められる女性の役割>と一致せず、女性発達障害児者は苦し

むことになるかとされていた。この苦しみに
ついて、ある程度の適応を目指すための整
理整頓の仕方や女性らしさの獲得の方法に
ついて述べられることもあったが、主には
特性があるのだから女性らしくしないで
いい、特性からくる苦手さを無理に克服し
なくても良い、というような〔特性による
苦手さがあるため＜女性らしく＞なくて良
いとする言説〕(A,B,C,D,E,G,K,L,M,N,R)が
支持されていた。特に女性同士のコミュ
ニケーションにまつわる問題についてはこの
対応策が支持されることが多く、「男性的
なコミュニケーションをする」「複雑な女
性の人間関係には入らないようにする」な
どと述べられることが多かった。

9) 【支援者の想定している一般的女性像】
(A,B,C,D,E,G,I,K,L,M,N,O,P,Q,R)

このように、支援者本において女性発達
障害児者をどのような存在として想定して
いるのかを見ていくと、その裏側に＜定形
発達の女性＞、つまり一般的な女性をどの
ような存在として支援者が考えているのか
も現れてくる。発達障害であるから苦手と
されていることが問題にならないのが＜一
般的女性＞である。一般的女性は、＜ガ
ールズトーク＞という、目的のない会話を
楽しむものとされ、恋愛、噂話、ファッ
ション、身近な交友関係、アイドルなど
の女性であれば通じる会話をテンポ良く
しており、それらは一般の男性には理解
ができなかったりついていけなかったり
するものであるようだ。つまり、〔女性
同士の会話を楽しめる〕(A,B,C,E,G,K,
L,M,R)存在であり、〔複雑な人間関係
を築く〕(D,G,K,N,R)ことで

生活していると考えられているのである。

また、ここで述べられているような【支
援者の想定している一般的女性像】が持つ
＜女性同士の関係性＞は、以下のような言
説によって、より特殊性を強調されている
こともある。

「男性的な人付き合い」に変えてみる。
人間関係での失敗が多い人は、
いっそのこと、付き合いの幅を狭めて
しまいましょう。女子のグループから
離れ、仲の良い人とだけ付き合うよう
にします。(宮尾 2015a: 60)

共通の趣味を持つ男友達と“ボーイ
ズトーク”をするのも一つの考え方で
す。アニメや鉄道など特定の分野に詳
しい複数の仲間と、ワイワイガヤガヤ
と情報交換するのも楽しいものです。
相手の顔色や場の空気を意識しながら
のガールズトークと違い、感じたこと
や知っていることをストレートに口
に出しながら、会話のキャッチボールを
学ぶことができます。(宮尾 2020: 50)

＜ガールズトーク＞に入らないようにし
たり、女性集団から距離を置くというこ
とが述べられる際に、「『男性的な人付き
合い』に変えてみる」「男性っぽい付き
合いができる集団に入ってしまった方が、
居心地が良いケースも多いのでしょう。」
というように、女性的な人付き合いでは
なく男性的な人付き合いにする、と勧め
られている。支援者本では、男性的な付
き合いについての詳細な説明や具体的
な説明は述べら

れていない。すなわち男性的な付き合いは自明なものや一般的なものとしてされている。このことは女性的な付き合いが特異なものであり、特殊なものであり、女性特有のものであるという前提があるということを示している。

また、家事などの複雑なマルチタスクをこなす、結婚してマルチプレイヤーになることができるなど、[マルチタスクをこなせる] (C,D,E,I,K,L,P,Q,R) ことも特徴として述べられている。さらには

「女性らしさ」は形のないもの。誰にとっても、わかりにくいものかもしれません。しかし多くの女性は、大人になるにつれ、必要最低限の習慣やマナーは身につけていきます。(宮尾 2015a: 18)

といったように、[女性らしさ・女の子らしさを身につけることができる] (B,E,N,P,Q,R) 存在としても考えられている。この〈女性らしさ・女の子らしさ〉には、異性愛規範が埋め込まれているとも言えるだろう。多くの著作で、男性との恋愛が前提とされており、恋愛をして結婚し子育てをすることが前提とされる記述があった。

また、恋愛がわからないという女性発達障害児者に対するアドバイスとして、

親しくなりたい男性に対する話し方、好意の示し方、相手の気持ちの読み取り方などを、映画を通して視覚的に学びます。自力では習得しにくいこ

とを、映画という手本によって理解するのはです。(宮尾 2015a: 88)

基本的なスキルを学ぶことが重要なので、奇をてらった作品ではなく、古い作品や王道的な作品が良い。(宮尾 2015a: 89)

ということも述べられている。男性と恋愛をし、そして映画のストーリーに見られるような典型的な恋愛をする存在として〈一般的女性像〉が想定されているということであろう。そして、これまで述べられてきた〈一般的女性像〉は揺るぎのないものとして描かれているのである。

IV. 考察

1. 男児・男性の発達障害と女児・女性の発達障害の違い

これまで発達障害は男児・男性に多いとされてきたため、研究が男児・男性を中心に行われてきた。そのため、女性の発達障害の特徴は未だ検討されているところであり、現行の診断基準には当てはまらないが生きづらさを抱えている女性が存在する、ということであるようだ。アスペルガー症候群は、提唱者のハンス・アスペルガーが男児についての研究としてまとめたが、その裏には、同じような特性を持つ女児は子宮性のヒステリーとして処理されたために、アスペルガー症候群として記述されなかったという歴史もある (E.Sheffer 2018=2019)。また、学校生活において目立つ特性を示す男児には注目が集まっていたが女児は見逃されてきたということについても、周りに迷惑をかけているのかどう

か、学校適応ができるかどうか、が基準になっており、本人の苦しさを見ようとされてきていなかったということが言えるかもしれない。女兒が教室の中で教員の指示を拾えず、次の動きがわからず一人で静かに困っていたり、忘れ物が多いために困っていたりするような場合には、その悩みには気づいてもらえない現状があった。そのため支援者の反省的な言説として、女性の発達障害は周りに迷惑はかけないが、その内には生きづらさを抱えているのだ、という言説が生まれているとも考えられる。

2. 支援者本に残るジェンダーバイアス

〈女性の発達障害児者〉がどのような存在として語られているのかを明らかにすると同時に、〈一般的女性像〉がどのように想定されているかも明らかになった。ここでは〈ガールズトーク〉を用いてコミュニケーションをとったり、〈暗黙の了解〉と〈気づかい〉を重んじ、グループを形成して生活している姿が明らかとなった。そしてこれらはゆるぎのないものとして描かれている。

しかし一方で、掃除や洗濯、家事などについては「ジェンダーロール」という言葉や「世間で求められる女性の姿」といった言葉で言及されることもあり、ジェンダーバイアスに意識的でもある支援者の姿がうつしだされている。【ジェンダーロールと特性が一致しないことによる困難】というカテゴリーが示すように、支援者は、ジェンダーロールやジェンダーバイアスといったものが〈女性発達障害児者〉の困難さにつながると問題視しているのである。

いろいろな女性像があってもよいはず。本来、一人一人の個性は異なるものですから、全ての女性が共通の性質を持つということはありません。細かいことに気がつく女性もいれば、大雑把な女性もいます。世話好きの女性もいれば、人の世話を焼くのが苦手な女性もいます。同じことは男性にも言えます。性別に基づいた固定観念にとられる必要はありません。(中略) 妻が100人いれば、100通りの「妻像」がある、母親が100人いれば100通りの「母親像」があるということが、自然に受け入れられる社会が求められます。(本田・植田 2019: 137)

というような記述もある。支援者も「いろいろな女性像」や「性別に基づいた固定観念」といった言葉で、ジェンダーバイアスが女性発達障害児者にとっての生きづらさとなっていることに言及していたり、それらを打ち破る方向を向いていたりはするはずなのである。しかし、〈一般的女性像〉に対してのジェンダーバイアスは保持される構造がある。さらに、これらの言説が広まることは、ジェンダーバイアスの再生産を行なっているということでもある。女性発達障害児者が困難さを抱える元になっているものを保持するだけでなく、作っている可能性もあるのである。このように、ジェンダーバイアスが女性発達障害児者にとっての生きづらさの要因となっていることに言及しながらも、〈一般的女性像〉に対してのジェンダーバイアスが保持されている現状から、支援者の個人モデル的な支援の

あり方も垣間見える。支援者は、女性発達障害児者が現行の社会のなかで、いかに自分の特性を理解し問題に直面せずに生きていくか、という視点で支援をしており、社会の側に問題を見出しながらも、現行の社会の規範のあり様を変えていくことは積極的に目指さず、発達障害とされる個人に、意識の変容や行動の変容を促しているのである。

3. 発達障害を受け入れることによって ＜女性らしさ＞から免責される構造

【ジェンダーロールと特性が一致しないことによる困難】に対し、支援者本では＜女性らしく＞しなくて良いとする提案をしている。例えば女性集団が苦手なのであれば、「男性的なコミュニケーションをする」「複雑な女性の間関係には入らないようにする」という対処法を勧めていた。これらは、「特性による苦手さがあるのであれば」というように、括弧付きのものでもある。これは免責を生むものである。つまり、女性発達障害児者に対し、発達障害というレッテルを受け入れるのであれば＜女性らしく＞しなくて良いということ伝えてるのである。定型発達であれば女性らしくできるのであるが、発達障害があるから＜女性らしく＞することが苦手なのである、という言説が形成される。このようにして、＜一般的女性像＞は固定化されたままであり、ジェンダーバイアスは保持され続ける。女性発達障害者は発達障害というレッテルを受けることで＜女性らしさ＞や＜女性特有のもの＞から逃れることができる一方で、その生きづらさの原因

である＜女性らしさ＞＜女性特有のもの＞は崩れないのである。発達障害であるからジェンダーバイアスから逃れることが重要なのではなく、全ての女性にとって重要であるという言説を用いなければ、ジェンダーバイアスは保持され続け、支援者が対象としている女性発達障害児者の生きづらさを打破することは難しくあり続けるのである。

V. 結論

以上、女性発達障害児者を支援者がどのような存在として捉えているのかを、支援者本を分析することにより明らかにしてきた。女性発達障害児者は気づかれにくく見逃されやすい存在であるとされてきた。その理由には、行動が目立たず、周囲が困らないこと、そして診断が男児・男性を主として作られていることが挙げられている。そういった気づかれにくく見逃されやすい存在である女性発達障害児者も、思春期以降に＜ガールズトーク＞ができなかったり＜女性の集団＞に馴染めないことで問題が顕在化するとされている。＜ガールズトークができない＞＜女性の集団に馴染めない＞のは発達の特徴からくるものであるため、そういったものから距離をおくことを対策として勧めている。一方で、そう語る際に表現される＜ガールズトーク＞や＜女性特有＞という言葉には、＜一般的女性像＞へのジェンダーバイアスがかかっているのである。支援者本で言われるような＜女性らしくなくて良い＞というものは、＜発達障害であるから＞という括弧付きであり、免責の効果を生んでいる。このよう

な語り方により〈一般的女性像〉に対するジェンダーロールは保持・強化され、女性発達障害児者が苦しむ原因となっている〈女性らしさ〉〈女性特有のもの〉は崩れない。そして、〈一般的女性像〉に適合することができない女性、つまり女性発達障害児者への〈女性らしくできない〉というレッテルもより強まっていくのである。

なお、本研究において十分に触れられなかったが、なぜ女性発達障害児者へ注目が集まるようになったのかという問いについても今後考える必要があるだろう。女性発

達障害児者への注目の裏には、ジェンダースtereotypeに基づく支援者側の問題提起があるとも考えられる。時代が変わるとともに女性に対する視線も変わり、そのため現在女性発達障害児者に注目が集まっているとも言えるかもしれない。

さらに、〈ガールズトーク〉や〈女性同士の関係〉以外にも、性被害にまつわる言説には支援者のジェンダーバイアスが隠れていたり、いわゆるレイプ神話が信仰されているような記述が見られたりもした。これらの点については、今後の課題としたい。

謝辞

本論文執筆にあたり、常に的確にご指導いただいた立命館大学大学院人間科学研究科村本邦子教授に厚く感謝申し上げます。

参考文献

- 浅井朋子・杉山登志郎・小石誠二・東誠・遠藤太郎・大河内修・海野千畝子・並木典子・河邊真千子・服部麻子, 2005, 「高機能広汎性発達障害の母子例への対応」『小児の精神と神経』（一般社団法人日本症に精神神経学会）第45号4巻：pp353-362.
- Asperger, Hans, 1944, "Die 'Autistischen Psychopathen' im Kindesalter." Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten 117, 76-136.
- 藤原美保, 2018a, 『発達障害の女の子のお母さんが、早めに知っておきたい「47のルール」』 エッセンシャル出版.
- . 2018b, 『発達障害の女の子の「自立」のために親としてできること』 PHP 出版.
- Grandin, Temple & Scariano, Margaret M. 1986 Emergence: Labeled Autistic, Arena Press (カニングハム久子訳, 1994, 学習研究社.)
- 本田秀夫・清水康夫・日戸由刈・今井美保, 2000, 「高機能広汎性発達障害の女子例に見られる発達精神医学的問題」『研究助成論文集』（明治安田こころの健康財団）第36号：pp29-38.
- 本田秀夫・植田みおり, 2019, 『最新図解 発達障害サポートブック』 ナツメ社.
- 星野仁彦, 2015, 『なんだかうまくいかないのは「女性の発達障害」かもしれません』 PHP 出版.
- 岩波明, 2020, 『医者も親も気付かない女性の発達障害』 青春出版.
- 神奈川県立中井やまゆり園神奈川県発達障害支援センターかながわ A, 2013, 『レディを育てる親と支援者たちへ』.
- Kanner, Leo, 1943, "Autistic Disturbances of Affective Contact", Nervous Child, 2, pp.217-250.
- 神尾陽子, 2005, 「自閉症に見られる性差」, 『教育と医学』（慶應義塾大学出版会）第53巻5号：pp.85-93.

女性発達障害児者を支援者はどのような対象として考えているのか

- 川上ちひろ・木谷秀勝, 2019, 『発達障害のある女の子・女性の支援——「自分らしく生きる」ための「からだ・こころ・関係性」のサポート』 金子書房.
- 木下康仁, 2003, 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』 弘文堂.
- 宮尾益知, 2015a, 『女性のアスペルガー症候群』 講談社.
- . 2015b, 『女性のADHD』 講談社.
- . 2016, 『女の子の発達障害“思春期”の心と行動の変化に気づいてサポートする本』 河出書房新社.
- . 2017, 『女性の発達障害 女性の悩みと問題行動をサポートする本』 河出書房新社.
- . 2019, 『ASD、ADHD、LD 女性の発達障害 就活／職場編』 河出書房新社.
- . 2020, 『女性のための発達障害の基礎知識』 河出書房新社.
- 村中直人, 2020, 『ニューロダイバーシティの教科書 多様性尊重社会へのキーワード』 金子書房.
- Oliver, Michael, 1983, *Social Work with Disabled People*, London : Macmillan
- 榎原賢二郎, 2019, 「障害社会学と障害学」 榎原賢二郎編 『障害社会学という視座 社会モデルから社会学的反省へ』 新曜社.
- 榎原洋一・高山恵子, 2019, 『最新図解 女性のADHDサポートブック』 ナツメ社.
- 瀬山紀子, 2006, 「国連施策の中にみる障害を持つ女性——不可視化されてきた対象からニードの主体へ」, 『F-GENS ジャーナル』 (お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラムジェンダー研究のフロンティア) 第6号 : pp.63-69.
- Sheffer, Edith, 2018, *Asperger's Children : The origins of Autism in Nazi Vienna*, WW Norton&co Inc (山田美明訳, 2019, 『アスペルガー医師とナチス 発達障害の一つの起源』 光文社.)
- 司馬理英子, 2017, 『マンガでわかる 私って、ADHD脳!?!』 大和出版.
- . 2018, 『わたし、ADHD ガール 恋と仕事で困ってます』 東洋館出版.
- . 2019, 『よくわかる女性のアスペルガー症候群』 主婦の友社.
- . 2020, 『よくわかる女性のADHD 注意欠如・多動症』 主婦の友社.
- 高山恵子, 2009, 「女性とADHD」 『そだちの科学』 (日本評論社) 第13号 : pp.100-105.
- 立岩真也, 2014, 『自閉症連続体の時代』 みすず書房.
- 寺島彰, 2001, 「米国および英国の障害モデル」 『国立身体障害者リハビリテーションセンター研究紀要』 第22号 : pp.1-7.
- Williams, Donna, 1992, *Nobody Nowhere: The Extraordinary Autobiography of an Autistic*, Doubleday (河野万里子訳, 1993, 『自閉症だったわたしへ』 新潮社.)

(掲載決定日 : 2021年5月14日)

Abstract

How women with developmental disabilities are seen by their supporters: Persisting gender bias and its propagation by supporters

Rina MUKAI

There has been a growing interest in female developmental disabilities in recent years, and several books have been written and published by professionals (e.g., doctors, psychologists, etc.) and the parents and families who assist women with developmental disabilities (called “supporters’ books”). This study clarifies how these advocates perceive women with developmental disabilities. Supporters’ books were analyzed using the modified grounded theory (M-GTA). The results revealed that the advocates of women with developmental disabilities believe that women confront numerous difficulties because their developmental disorders are not easily recognized, they are prone to secondary disabilities, and they have problems that manifest during adolescence, marriage, or work life. Citing gender roles as a factor influencing the difficulties faced by women with developmental disabilities, the supporters exhibited a gender bias toward the general image of women. Supporters’ books also grant women with developmental disabilities the disclaimer of not needing to be feminine by accepting the label of developmental disability.

Keywords

developmental disabilities, women with developmental disabilities, intersectionality, gender bias

